

# 富豪刑事

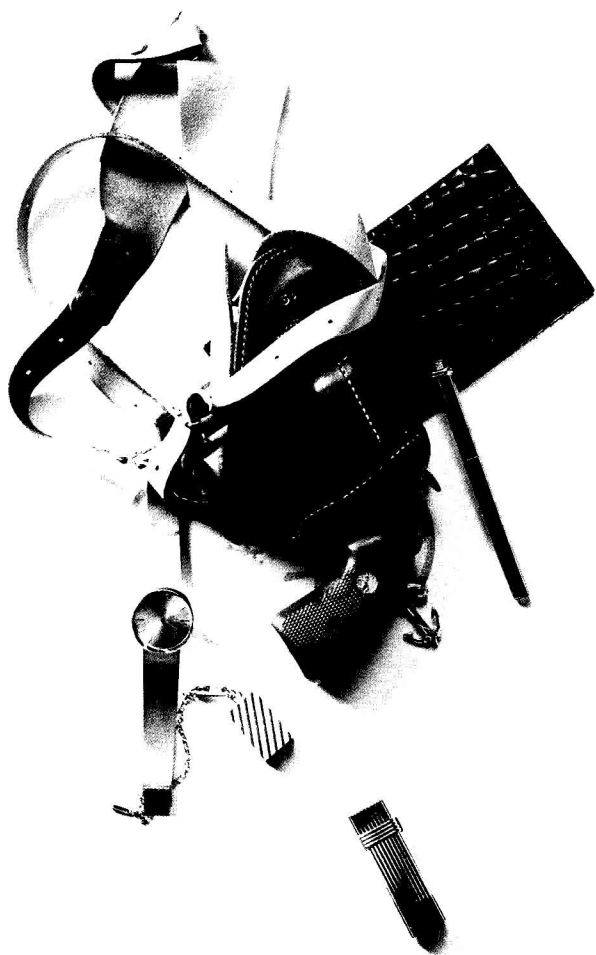
筒井康隆

新潮社



# 富豪刑事

筒井康隆



新潮社

富豪刑事・

一九七八年五月二〇日印刷  
一九七八年五月一五日発行

著者 筒井康隆ついでよしたか

発行者 佐藤亮一

発行所 株式会社新潮社

東京都新宿区矢来町七一

郵便番号 一六二

振替東京四一八〇八

印刷 大日本印刷株式会社

製本 神田加藤製本

定価 七五〇円



© 1978 Yasutaka Tsutsui Printed in Japan

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付  
下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

富豪刑事／目次

|             |     |
|-------------|-----|
| 富豪刑事の罠      | 5   |
| 密室の富豪刑事     | 59  |
| 富豪刑事のステイニング | 107 |
| ホテルの富豪刑事    | 171 |

装幀・插画  
真鍋  
博

# 富豪刑事



富豪刑事の囀おとり





「さて諸君。五億円強奪事件は、強盗罪の時効七年めまでにあと三カ月だ」

でつぷりと肥った特別捜査本部のキャップ福山警視が、メンバーである二十人の刑事を、アルフレッド・ヒッチコックそっくりの顔になかばあきらめの表情を浮べて見まわした。「投入した捜査員延べ約二十万人、身辺を洗った容疑者約十五万人、作成した捜査資料が資料室のひと部屋にぎっしり」

「それでも、容疑者を四人にまで絞ることができたのですから、これまでの捜査がぜんぜん無駄だったわけではありません」事件発生当時から捜査員だった狐塚刑事は、つい最近退職した前任キャップのあとを引きついでこの署へやってきたばかりの福山に、挑むような眼を向けた。

「いや。何も無駄とはいつとらんが」

あわてて弁解しようとする福山を無視し、狐塚は尖った歯を見せて全員を睨みまわした。「最も強い手がかりとなったあの特殊な塗料は、専門店からたった五十六人にしか売られていないことがわかった。この五十六人のうち、あの薄いウンコ色の分を買ったやつは」

「ベージュ色でしょう」横から、前歯が欠落してアルフレッド・E・ニューマンみたいな顔にな

った布引刑事が口をはさんだ。

「ベージュ色の罐かんを買ったやつは十八人。この十八人のうち、三人は女性だった。残りは十五人。この十五人のうち」

「二人は老人です」と、布引がいった。

「二人は六十歳以上の老人。残りは十三人。この十三人のうち、オートバイに乗れないやつが三人。残りは十人だ」

「待てまで。その三人を容疑圏内から除外して、本当にいいのか」福山キャップがあわてて訊ねた。「オートバイを持っておらず、無免許であるにしても、ひとりどこかでこっそり練習して、ということだってある」

狐塚は大っぴらに今さら何をという表情で宙を睨み、福山に向きなかつた。「そういう可能性のある者はむろんこの三人の中には含めていません。この三人のうち、二人は小学生。そしてもうひとりとは」

「片足です」と、布引が口を出した。

「オートバイに乗るのに不自由な人だ」と、狐塚が言いなおした。「これで残りは十人。そのうちの三人には、確実な現場不在証明がある」

福山キャップは、今度はやや遠慮勝ちに訊ねた。「その三人のアリバイが崩れる可能性は絶対はないのかい」

「ひとりは買った塗料で大学の校舎の壁に資本主義がどうのこうのと書いたため、事件当事は警

察にいました。もうひとりとは事件の数日前に病死。つまり事件当日は天国にいたことになりました」狐塚は真面目な顔で、馬鹿でいいいにそう答えた。「最後のひとりとは県警本部の会議に出席中でした。つまりわれわれの署長なんです。当人は庭の兎小屋を塗装するために塗料を買ったと主張しておりますが、このひとのアリバイをもう一度確かめてみますか」

福山は咳ばらいをした。「いや。それには及ばんだろう」

「残り七人」と、狐塚が大声でいった。「うち三人は、買った塗料を使っていないことがはっきりしている。むろん、本人たちにはわからないように調べて確かめたのだ。中のひとは塗料屋で塗料を買った直後、店の前でころんで罐の蓋をとばし、道路に塗料をぶちまけた。大騒ぎになったので、このことは商店街の多くのひとから確認できた。あとのふたりは庭と物置に罐を放置している」

「残りは四人」掛けあいのように布引が横から叫んだ。

「マザー・グースに、テン・リトル・インディアンという歌があったな」くすくす笑いながら猿渡刑事が、隣りの大助にそうささやいた。

「何がおかしい。私語はつつしんでくれ」狐塚が猿渡を睨みつけてから、大助が口にくわえている葉巻を見咎め、唇の片端を吊りあげて犬歯を見せた。「神戸君。この部屋で葉巻はやめてくれ」

「あ。これは失礼」大助はいそいで、まだ一、二センチしか灰になっていない葉巻の火をもみ消し、もみ消す時にぼつきりと中ほどからふたつに折れた葉巻を惜しげもなくアルミの灰皿に捨て

た。

「でも狐塚さんだって、さつき煙草を喫っていたじゃないですか」にやにや笑いながら、猿渡がいった。

「紙巻きならいい。しかし葉巻はいかん」狐塚が目を三角にした。「わざわざハバナから取り寄せた一本につき八千五百円の葉巻を横でぶかぶかやられて、仕事の話なんかできるものか」

「そいつは一種の差別だなあ」猿渡が、あいかわらず薄笑いを浮かべながら大助を弁護した。「だって神戸君は、葉巻しか喫わないんだから」

猿渡を睨みつけている狐塚の横から、布引が、これも挑戦的ににやにや笑いながらいった。

「おいおい。刑事ともあろうものが、あまり大っぴらに大富豪の味方をするなよ」

「ははあ。君がそうかね。あの大富豪の神戸喜久右衛門氏の息子さんというのは」福山キャップが小さな眼をまん丸にして大助の方へ身をのり出した。「署長から、話だけは聞いたが」

「話を続けます」狐塚が、怒鳴るような声を出した。「残りは四人だ」

「四人です。四人」布引が、わざわざ四本指をかざし、全員にうなずきかけた。

「この四人はいずれも事件当日のアリバイがなく、オートバイを持っていて、年齢は二十歳台後半で、モンタージュ写真に、まあ、似ているといえれば似ていて、例の塗料を買っている。もっとも、その塗料をすでに使っているかどうかはまだわからない。四人にはそれぞれ尾行がついているが、絶対に当人たちには悟られないようにしている。したがって聞き込みも大っぴらにはやっていず、無論まだ家宅捜査もやっていない」

「しかし、あと三カ月しかないんだよ、君」福山キャップが、ややおどおどした口調で狐塚にいった。「時効ならんうちに、早いことその四人を参考人として調べはじめた方がよくはないのかね。そして家宅捜査を」

「われわれは」狐塚が声を低くした。「犯人が家の中に金を隠していなかった場合のことを考えております。いったん参考人として調べられたら、それ以後はもう常に尾行がついていいるものと彼らは思うことでしょう。しぜん、今まで以上に、金を隠してある場所へは足を向けようとしなくなります。彼らを警戒させるような調べかたは、もつとさし迫ってからでもいいと思います」

「三カ月という時間が、さし迫っているかいなかは考えかた次第だな」

渋い顔でそう呟いた福山に向きなおり、狐塚は軽く一礼した。「もちろんキャップがすぐ彼らを参考人として呼ぶようにご命令なさるのでしたら、わたしとしては何もこの意見を押し通すつもりはないのであります」

狐塚や福山からいけば分離した席にいる猿渡が、疳高い声でいった。「容疑者として調べられていることに気づいた場合、犯人が、金の隠し場所を変えようとするなど、自ら墓穴を掘るような行動をとることも考えられますが」

狐塚は肩をそびやかして猿渡に軽蔑の眼を向けた。「そりゃ、たしかにそういう犯人もいる。しかしこの事件の場合、ああいう犯罪を考えついたほどの頭のいいやつが、そんな馬鹿な行動をとると思うかね」

「ではこのまま、時効ぎりぎりになるまで、彼らの尾行を続けるというのかね」福山キャップは、どうやらそれがいらいらした時の癖らしく、デスクの上に指で無限大の記号を描きながらいった。

「ほかになんの手も打たず、ただ尾行だけを続けるというのかね」

狐塚はやや吃り<sup>ども</sup>気味に答えた。「それはまあ、尾行と平行して、彼らに悟られぬ程度に身边を洗うとか、そういったことはやるべきでありましょうが、基本的にはその」

「あのう」大助が、いちばんドアに近い席でおずおずと片手をあげた。「ひとつ、提案があります」

不機嫌な表情のままで福山はうなずいた。「言ってみたまえ」

「犯人が金を使いはじめれば、隠し場所もわかる筈です。ですから、その四人に金を使わせてみればいいと思います」

福山はまた眼を丸くした。「どうやって」

「わたしが、刑事という身分を隠して彼らと接触します。そして彼らが大金を使わざるを得なくなるような工作をします」大助はのんびりした口調でいった。「これならまあ、尾行と平行してでもやれると思います」

「どんな工作をするっていうんだ」狐塚が汚ないものを見る眼で大助を見ながら訊ねた。

「はあ」大助は色白の顔を少し赤くした。「そこまではまだ考えていません。相手次第で臨機応変に」

「そんな出たらめな」布引が大っぴらに苦笑した。「こういう事件ではね、神戸君、きちんとし

た捜査方針に加えて、明確な計算が必要なんだよ。勘に頼った行きあたりばったりでは、この犯人は罠にかかっちゃくれないよ」

「いや。なかなかいい方法だと思うな」猿渡が大助に味方しはじめた。「それに、ほかの者ならともかく、神戸君にならその役はうってつけじゃないか」

「どうしてかね」

さつきから興味深げに眼を輝かしはじめていた福山キャップに向きなおり、猿渡は答えた。

「ひとに金を使わせようとするためには、先にこつちが金を使って見せる必要もありますからね。それとなく相手に金を使わせるよう仕向けるには、その方法が一番でしょう。神戸君ならこのメンバーの中でもいちばん若いから、四人とはすぐ親しくなれる筈だし、四人の中の誰かが犯人であつた場合、その犯人は、ただ神戸君とつきあっているだけで金を使いたくなる筈です。神戸君がそれを意識していずとも、ただ神戸君の金の使いかたを見ているだけでね」

「君もそうなのかね」あまりにも大っぴらに大助の提案を支持する猿渡へやや警戒の眼を向け、福山がいった。

猿渡はためらわずに答えた。「ぼくには金がありませんからね。はじめからあきらめていますのでそんな気にはなりません。しかし犯人は違います。犯人は、とにかく五億という現金を持っているのですから」

「容疑者と友達になつたりして、もし犯人に刑事という身分がばれたらどうする」狐塚が顔をしかめたままであつた。「そんなことになつたら取り返しがつかんぞ」



ここぞとばかり、猿渡は大笑いをして見せた。「ばれる筈がないでしょう。キャデラックを乗りまわし、葉巻を半分も喫わずに捨て、十万円以上のライターをいつも置き忘れ、イギリスで詠えた仕立ておろしの背広を着たまま雨の中を平気で歩くような刑事がどこにいますか。神戸君がぼろを出すとすれば、それは大富豪としてのぼろを出すわけで、ぼろを出せば出すほど刑事らしくなくなるのです」

「君はいつも、そんなことをするのか」福山キャップはあきれ顔で大助を眺めた。「十万円以上のライターをばらまいたり」

「ばらまくなんて、とんでもない。いつもそんなことばかりしているわけではありません」大助は猿渡をちよつと睨んでから、福山に紅潮した顔を向け、不服そうにそういった。それから、やや苛立たしげに眉間へ皺を寄せた。「いかがですか、キャップ。ぜひよくに、容疑者四人との接触をお許し下さい。これは、やってみる価値があると思うのです。うまくいかなかった場合でも、あとの捜査に迷惑をかけるようなへまはやりません。もちろん最後まで、刑事という身分は絶対に明かしませんし、あらゆる手段を使つても身分がばれないようにするつもりです。なんならぼくの、刑事という職を離れた、私生活における個人的な接触であるということにしていた方がいいのです」

「まあ、たてまえなどはどうでもよろしい」福山が、大きくうなずいた。「よし。許可しよう。君の私有財産を捜査に使うという点が少し気になるが、私的に関係者と知りあって金を使つてしまふケースだってなくはない。ま、その金のことは一件落着後に捜査費用として請求するかどうかどう